

# 宮ノ前遺跡

発掘調査報告書

1975

志布志町教育委員会

## 例　　言

- 1、本報告書は志布志町教育委員会が昭和48年8月17日から8月26日まで実施した志布志町宮ノ前遺跡発掘調査の報告書である。
- 2、本文の執筆、挿図の作成、及び写真撮影は発掘担当者の酒匂義明があたった。
- 3、本調査における出土遺物は志布志町教育委員会に保管している。

昭和50年8月31日

志布志町教育委員会

← 目 次 →

第一 章 序 説	1	
1、はじめに	1	
2、調査の経過	1	
第二 章 遺跡の位置と環境	3	
第一図		
第二図		
第三 章 トレンチの設定と層位	6	
1、トレンチの設定	6	
2、層 位	6	
第三図		
第四 章 出土遺物と遺構	10	
1、土 器	第八図	10
2、石 器	第九図	14
3、遺 構	第十図 第十一図 第十二図	18
第五 章 ま と め	20	
図 表 第四～第七図	22	
写 真	28	
参考文献	21	

# 第一章 序 説

## 1、はじめに

宮ノ前遺跡は、昭和39年志布志町誌編集のための資料収集活動のため志布志町四浦地区を調査していた永山又男氏（志布志町教育委員会）と筆者によって発見された遺跡である。その後本遺跡は上村俊雄氏（ラサール高校教諭）、眞訪昭千代氏（当時志布志高校教諭）らの表面探査活動によって、縄文時代中期から後期初頭に位置づけられている岩崎式土器を包括する単純遺跡であることが判明した。遺跡地は地形から集落跡をも想定される有望な遺跡として知られるようになるとともに、遺跡地の一部を破壊する者も出るようになり盗掘した形跡が残されていた。表面探査資料は志布志高校に保管されているが、資料整理中に岩崎式土器について問題点が見出されたので本遺跡の発掘調査を企画したものである。

一方、遺跡地附近の集落では過疎化が進むとともに遺跡地も荒地が目立つようになってきた、土地所有者はこの荒地に植林を計画していたので昭和48年夏に志布志町の委託業務として発掘調査を実施した。

発掘調査は、昭和48年8月17日から8月26日迄の10日間実施した。調査は別府大学教授賀川光夫氏の指導助言のもとに、酒匂義明が担当した。調査補助員として、別府大学学生中島哲郎君他1名、鹿児島高校考古学部浜田俊弘君他20名があたり、別府大学卒業生富来雅勝氏は貴重な日時をさいて、調査に協力していただいた。その他調査に際して、志布志町文化財保護委員会、志布志町教育委員会、遺跡地の測量を担当していただいた志布志役場建設課、宿舎として心よく校舎を貸していただいた四浦小学校校長児玉憲二郎氏、他教職員一同、発掘を心よく承諾していただいた猿渡辰盛氏と鍋山一夫氏、遺跡地までの道を修復して下さった地元民の方々には物心両面から、御援助いただき、ここに紙上をもって感謝の意を表します。

## 2、調査の経過

宮ノ前遺跡の発掘調査は昭和48年8月17日から8月26日まで実施した。

8月17日

調査員及び補助員は午後現地へ到着。ただちに発掘予定地内の荒地の草刈りや、機材の搬入を済ませた後、関係者との打合せを行なう。

8月18日

午前中雨の中で予定地の杭打を行なう。発掘地は賀川光夫教授の指導助言により遺跡地を $2 \times 2$ mのグリッドに組む。午後より表土の耕土作業を第Ⅰ地点より実施する。

8月19日

第Ⅰ地点の発掘作業に入る。昼食時に四浦校区バレーボール大会会場で遺跡の説明会を実施  
第Ⅱ地点は、D-8区にピットを確認したので、発掘区域を残された全区画の発掘に切り替える。  
岩崎式、土器、石器を出土する。

8月20日

第Ⅰ地点、第Ⅱ地点とも、本格的に遺物包含層の発掘にとりかかる。第Ⅰ地点では、石皿、石  
岩崎式土器片を出土、第Ⅱ地点では、岩崎式土器片、ピット5個を出土。

8月21日

第Ⅰ地点、遺物包含層を15cmの深さまで掘下げる。岩崎式土器片を出土。第Ⅱ地点は、E-G  
の2区を地層調査のため、地表面下200cmまで掘下げる。岩崎式土器片、石皿、炭化物を出土。

8月22日

第Ⅰ地点の遺物包含層を掘下げる。岩崎式土器の大型破片が多く出土する。第Ⅱ地点はPitの  
状態を写真撮影、さらに地主と交渉後第Ⅲ地点にトレントを設定し、ただちに発掘作業に入る。

8月23日

第Ⅰ地点は前日の作業に続き作業する。第Ⅱ地点はB-2区を拡張するとともにG-8区の擾乱  
部を詳細に確認するとともに、Pitの実測図を作成する。第Ⅲ地点は、南北方向に拡張する。

8月24日

第Ⅰ地点、遺物包含層を120cmまで掘下げる。第Ⅱ地点は遺物包含層下部まで掘り下げる。第  
Ⅲ地点はD-17、18区の遺物包含部や遺構を確認する。E-G区では地層調査のため200cm  
まで掘下げる。

8月25日

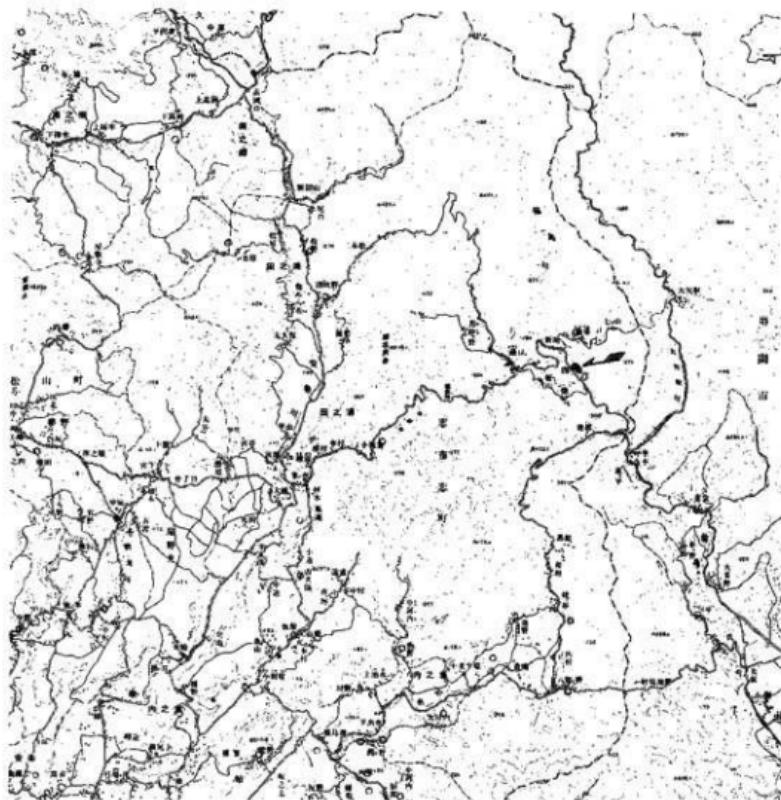
第Ⅰ地点、遺物包含層を最下部まで掘下げる。第Ⅱ地点は南側壁面及び東側壁面で断面図を作製  
した後、埋めもどし作業に入る。第Ⅲ地点では遺構の実測図作成とともに地層図を作成。

8月26日

第Ⅰ地点、地層図作成の後埋めもどし。第Ⅱ地点、埋めもどし。第Ⅲ地点、地層図作成の後、埋  
めもどし作業を午前中で完了し、ただちに、発掘地、宿泊地を撤去する。

## 第二章 遺跡の位置と環境

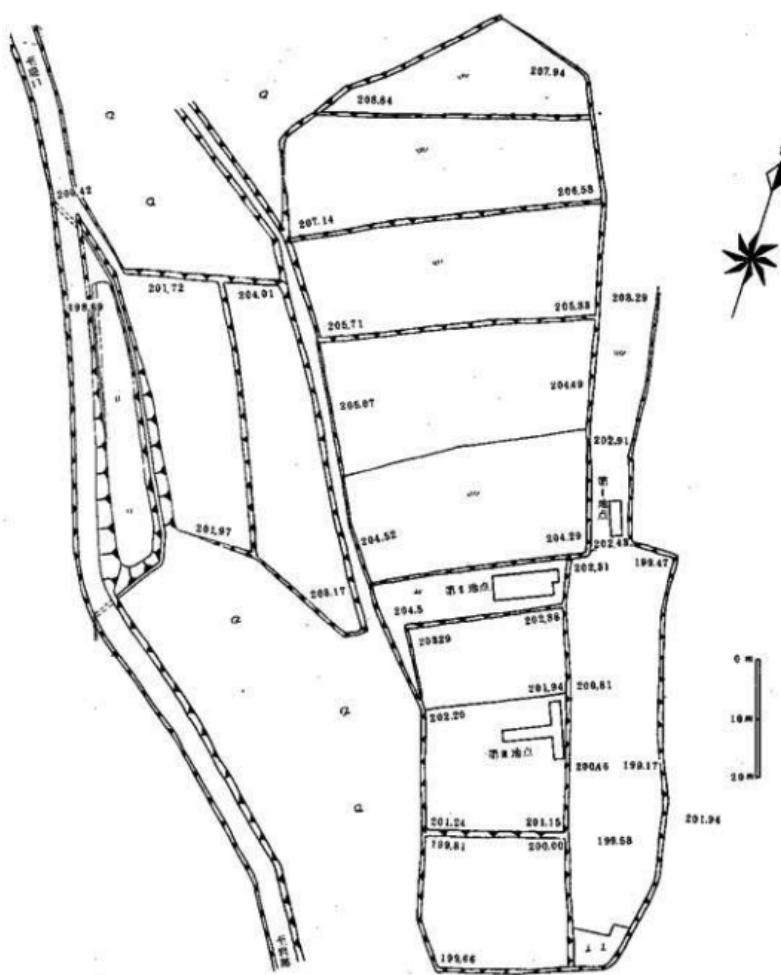
遺跡は鹿児島県曾於郡志布志町内之倉字竹下6651番地の5に位置し、通称は四浦・宮ノ前台地と呼ばれている。宮ノ前台地は、鹿児島・宮崎両県境附近に位置し、志布志湾に流入する福島川の上



第二圖 遺 跡 地

流約16kmの地点に広がる山麓台地の一つであり、福島川によって他の台地と分断され、侵食を受けたと考えられる。台地は、遺跡地附近で200mから209mの標高を数える。台地は三方を南那珂山地を形成する山系によって囲まれた小盆地の中央部に位置し、南側のみ福島川の侵食谷によって開かれている。台地上は畠地として利用されているが、台地表面は北側から南へ、台地中央部から東西両側へ傾斜する舌状の台地であったが、江戸時代頃より開墾が進められ、昭和にも開墾が進められ、現在では階段状に整備されている。そのため、遺跡地の表土は二次堆積土によって覆われており、開作によって、台地東側部分と、台地西側の一部は遺跡地が破壊されている。台地東側の深い侵食谷は豊かな湧水を利用し水田が拓かれ、西側の谷底平野も水田が拓かれているが、一部には雜木林も残っている。土地の所有者の話では、気候は比較的温暖で各種の木の実も豊富で、野生動物が多くて困ることであったが、調査中にいきなり茂みから兎が飛び出し捕えたこともあった。

遺跡地周辺の他遺跡の分布状態は、後谷遺跡、片野洞穴などが存在する。



第2図 進路付近地形図

### 第三章 トレンチの設定と層位

#### 1、トレンチの設定

遺跡地は耕作のため階段状になっており、表面採集の際遺物を多く出土した地点、住居跡の確認というような条件を満たし、さらに第一次調査であり、本遺跡の基礎資料を得るために、台地東側部分を中心に発掘することにしトレンチを設定した。トレンチは土地所有者の耕作の関係で三地点を選んだ。  
第Ⅰ地点は、台地東端に位置し、巾6mの狭い荒地に2m×6mで崖面から1m離して設定した。崖下からは多くの史料を採集しており、完型品も採集されている。南側より2mごとにA-1区からA-3区まで設定した。

第Ⅱ地点は、遺跡のはば中央部と考える荒地になっている地域で、東西方向に4m×10mのトレンチを設定した。東側より2mごとにC~G区まで設定し、北側より2~8区とした。1区は今回の調査では未発掘である。第Ⅲ地点は第Ⅰ地点より6m南側に位置し、さらに西側に1.2m離して設定したが、このトレンチはC-2、D-2、D-8区にピットが出土したことからC-2区の東側に1m拡張してB-2区を設定した。

第Ⅳ地点は、第Ⅱ地点の南側に2.2m離して2m×10mで東西方向に設定した。このトレンチは遺跡地の基礎資料を得るために設定したのであるが、ピットが出土するおよび、住居跡の可能性が大きいため、D区を南北方向に2m×10m拡張したため、第Ⅳ地点のトレンチはT字状の形態をなすに至った。

#### 2、層位

遺跡地における地層は第1層の表土耕作面の開墾による二次堆積土となっている。第Ⅱ地点と第Ⅲ地点の地層にはほぼ類似した状態になっているが、第Ⅰ地点は前者とはやゝ異なる順序が確認された。  
第1地点

第1層 暗褐色砂質土壤で表土耕作土であり、トレンチ東南部で24cmを数えるが、北西部では54cmの厚さで堆積している。

第2層 褐色砂質土壤でA-1区~A-2区にのみ堆積している。東南部に厚く堆積しており、現在の地表面より40cmの深さには、桜島の大正4年の噴火の時に堆積したといわれる灰白色の火山灰が約4cmの厚さで点々と堆積していることから第2層以上は二次堆積面と考えるので、二次堆積土はもっとも厚い地点では72cmある。

第3層 黒色砂質土壤の旧表土層と考えられる。上部は開墾により開削されていると考えられるが下部は樹根により凹凸が大きい。トレンチ北西部から東南部の方向に傾斜しており8cm

から4.8cmと厚さは一定ではない。

第4層 褐色土壌で、やゝ粘質をおび、非常に固く締った状態になっている。トレンチ西側より東側へ傾斜しておりA-1区では37cmの厚さを有するが、A-3区では89cmの厚さを有する。遺物包含層である。

第5層 黄色土壌で粘質が非常に強く、部分的に砂礫を含む。第Ⅱ地点、第Ⅲ地点でも確認される。遺跡地の基盤をなす洪積層と考えられるが遺物は包含しない。

#### 第Ⅲ地点

第1層 黒色砂質土壌である。第Ⅰ地点で確認された第1層とは異なり、第Ⅰ地点の第3層に該当する。この地層は部分的に暗褐色土を含んでいたり地形、耕作土という条件などから、二次堆積土を混入していると考えられる。

E区からG区の下部は耕作によると考る落ち込みが確認される。

第2層 黒色砂質土壌を含む暗褐色土である。この地層はF区からG区にのみ確認されたが、擾乱層と考えられる。

第3層 褐色土壌でやゝ粘質を含む。C区からD区にのみ堆積しておりトレンチ東側に厚い。遺物包含層であるが、第Ⅰ地点には堆積していない。

第4層 暗褐色土壌で粘質が強い。作業中は第3層との区別が困難であった地層である。第3層から次第に明るい褐色に変化していくという状態で、上部地層とは明らかに異なるが、そのレベルは確認しにくい遺物包含層である。第Ⅰ地点第4層より軟かい。下部にはパミスが小さな塊状でみられる。

第5層 第3層よりやゝ明るい褐色の粘質土壌である。作業中は第3層から第5層まで、土層の色の変化をみきわめることは困難であり、遺物の出土状況からも変化はみられなかった。

第6層 黄色土壌で粘質が非常に強く、無遺物層である。この地層の堆積状態を確認するため、E-2区からG-2区では深さ200cmまで掘ったが、粘質が次第に強くなり続いている。遺跡地の基盤をなすと考えられる。

#### 第Ⅳ地点

前述の如くT字状のトレンチである。東西方向のトレンチでは第Ⅱ地点とはやゝ同様の層序が確認されたが、南北方向の壁面では他の地区との層序とはやゝ異なる。

東西方向の層序では第1層が黒色砂質土壌、第2層は塊状にごく一部で確認されたのみである。第3層が暗褐色土壌でやゝ粘質を含む。下部にパミスが点々と小さな塊状にみられる。第3層は下部のパミスは第Ⅱ地点では第4層下部にみられた。第4層は第Ⅱ地点第4層と同じである。しかし、第Ⅳ地点第5層を明確に把握することは困難であり、第4層下部には第6層が堆積していた。

南北に伸びる壁面は遺構部を中心として層位が細かく分けられる。

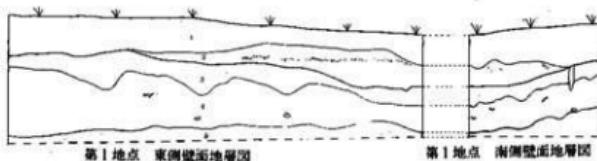
第1層 暗褐色砂質土壌で表土耕作面を形成するが、二次堆積土である。

第2層 黒色砂質土壌で、旧表土層と考えられる。遺構部では耕作によると考えられるが、下部  
第8層が混入しており粘質をやゝ帯びることから、遺構部直上は2層とした。

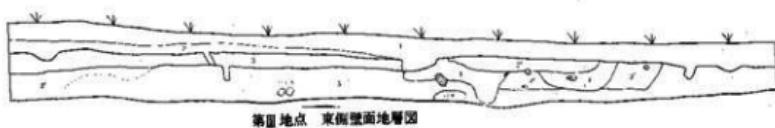
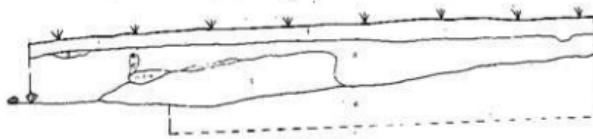
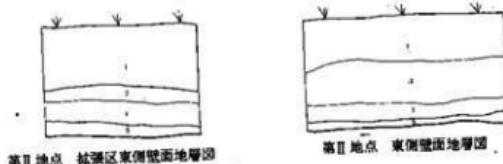
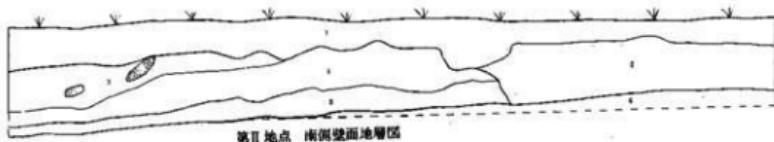
第3層 褐色土壌でやゝ粘質を帯びる、遺跡地全域に堆積する遺物包含層と考えられ、この地区  
では17cmの厚さで堆積しているが遺構部南側では確認できない。8層は土壌の色が8層  
よりやゝ暗く粘質を帯びる状態は第8層と区別できない。2層と比較できるが第8層とも  
類似する。

第4層 暗褐色粘質土壌で、遺構部にのみ堆積しており、色、粘質とも第Ⅱ地点の第4層と類似  
しているが、塊状に確認され、作業中にこの地層の確認は第Ⅱ地点と同様に極めて困難で  
あった。

第5層 無遺物層の褐色粘質土壌で、次第に明度を増し第6層へと移行する土壌で、部分的にパ  
ミスが塊状に堆積している。5'層は5層の一部と考えられるが、第5層より淡い褐色であ  
る。



桜島火山灰  
(大正4年の噴火による)



第3回 地層断面図

## 第四章 出土遺物と遺構

宮ノ前遺跡の出土遺物は第4層褐色粘土層にのみ包含している。出土品は土器・石器・炭化物に大別される。

### 1、土 器

土器は縄文時代中期末と考えられる岩崎式土器を主体とし、宮崎県綾町尾立遺跡出土の土器と類似した土器片、指宿式土器、さらに第6層の直上からは前平式土器が数点出土している。

(第1地点) 第1地点は遺物出土量のもっとも多い地点である。第4図1~8、7は口唇部に指頭を利用して凹列を入れた波状口縁である。1~2は器壁を二枚貝腹線を利用して調整したあと長さ2.5~3cmの刻目あるいは指頭痕様の凹列を縱に施してあるが、3~7にはこの凹列がなく横走する浅い沈線を有するが、口唇部の刻目は外後にのみ残る。4は岩崎式土器を伴出する遺跡においてよく採集される土器片である。表面は黒褐色をなし、裏面は赤褐色をなす。焼成は比較的良好で、胎土に墨母を混入する。口縁部は山形の突起をなし、平坦な口唇部がみられる。指頭によると考えられる巾広の浅い凹線を貝殻条痕を有する器壁に施してあり、阿高式土器との関連性を指摘できる。裏面は貝殻条痕が強く残る。5は把手の一部が残る。文様から2との関連性がうかがえる。6は貼り付け凸帯で山形口縁の突起部と考えられ、凸帯部には指頭による刻目を有し、焼成は良好で貝殻条痕もなく指宿式土器と類似している。8~10・12~13の口縁部は、口唇部が半坦化し、貝殻条痕を有する器壁に沈線を主体とする施文がみられる。8・13はヘラ引きの深い沈線文で文様が曲線を巻状に構成していることから岩崎式土器片と考えられ、15も同一の土器片と考えられる。9・12の土器片は非常に浅い沈線文土器で、数本の曲線を平行に施してあるが、沈線は指頭を利用しているようであり、11も同一の土器片と考えられる。10は黒褐色の土器片で、平坦な口唇部を有し裏面にのみかすかに条痕がみられる。文様は対称的な円弧状の細く浅い沈線がみられるが、沈線間隔円弧の外側の沈線が消えていることから二枚貝口唇部を利用して施文したものと考えられる。14は二本のヘラ引き沈線間にヘラを利用したとされる擬似縄文を施してある。16は裏面に貝殻条痕を有し焼成の良好な沈線文土器であるが、沈線は深い。また沈線は巻状になることから岩崎式土器片と考えられる。17は第4層上部から出土した土器片で、器壁の貝殻条痕は表裏ともなく、沈線は細く、沈線間にヘラを利用した刺突文もみされることから、指宿式土器片と考えられる。

第8図-8はいわゆる岩崎上層部と称されている土器片である。口唇部の刻目ではなく、口縁部には、ヘラを利用し、1~2cmの長さを有する凹列を平行に横走し、頸部から剣部には三本の直線を施す。

器壁には表裏とも貝殻条痕が見られる。第8図4は把手を有する土器で、口唇部にヘラによる刻目を施し、口縁部から頸部には、ヘラによる沈線文を幾何学的に施すが、短直線を主体に刺突文を組合せており、把手にも刺突文を施してあるが、器壁の条痕はかすかにみられる。第8図-5は口唇部に指頭による刻目を施し波状口縁となっているが、四ヶ所に突起部があり、突起部にも同様の波状をなす口縁部から頸部にかけて、ヘラによる沈線によって施文してあり、山形突起部下部に文様の主体部を施す。器壁には表裏とも貝殻条痕がみられる。器形は、第8図-4が口縁部が外反する深鉢型であるが、第8図-5は頸部がやゝしまり腹部がふくらみをもつ。第8図8～5はほど同じ地点から出土し、4には周囲及び、土器片内側からドングリの炭化物が出土したが、第4図-4と重なり出土した。

(第4図-22頁参照)

(第II地点) 第II地点出土の土器には、前述のごとく、第5層最下部、第6層直下に角筒土器として知られる前平式土器が出土した。

第5図1・2の土器片は第4図-1と類似したものであるが、指頭による圧痕は浅く、2は条痕もかすかに残る程度である。出土層位は第3層上部である。3は口唇部の指頭による刻目は深く沈線も深い。土器の焼成は良好で赤褐色を呈し、条痕はかすかに残る。4・6は口唇部は平坦でヘラによる刻目を有し、口縁部にはヘラによる凹列を並べたものでその下には沈線を施してある。4は貝殻条痕が表裏ともみられる。5は赤褐色の土器片である。第4図-9に類似する非常に浅い凹線文がみられるが、口縁部には貝殻口唇部を1列、口唇部に平行に押捺してある。これは、岩崎土器にみられる指頭もしくはヘラによる圧痕文と同様の施文意識のもとで押捺されたものと考えられる。7は口唇部に貝殻口唇部によって刻目を施す。細く浅い沈線間に貝殻条痕を施し、擬似繩文的効果を出したものと考えられる。8は褐色の焼成の良好な土器片で、頸部がしまり、頸部から口縁部は外反するが、口唇部外縁には刺突文がみられ、頸部には二本の沈線がみられることから指宿式土器片と考えられる。11も指宿式土器片の突起部と考えられる。9は山形口縁の突起部である。突起部の口唇断面は丸みを有するが、突起部以外の口唇断面は平坦である。沈線文は岩崎式土器にみられる巻状の曲線化がみられる。11・12は二本の沈線間に擬似繩文を施した土器片である。11は口唇部外縁と、沈線間の擬似繩文はヘラ様の用具先端による小さな刺突文であるが、12は太い沈線間に擬似繩文は二枚貝口唇部押捺によって施文してある。14・15・17と同様な手法を基礎としている。14・15はヘラにより、17は二枚貝口唇部によって施文してあるが、17は伸びになる沈線を二本の沈線によって施す。11・12は器壁の貝殻条痕は表裏ともほとんど認められないが、14・15・17には浅い条痕が認められ胎上に雲母が混入しており、11・12よりやゝ深い地点より出土した。13は竹管を押圧し、その下部には巾広の凹曲線文がみられる。18は貝殻条痕は強く残るが、二本の平行する沈線は指宿式土器に類似する。19・20は岩崎式土器頸部の一部と考えられる。

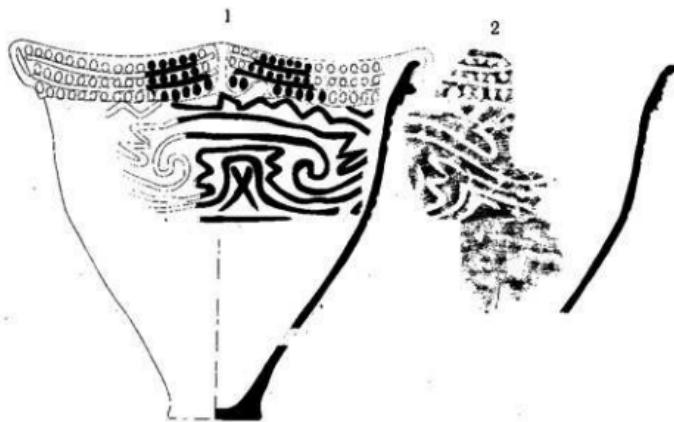
(第5図-24頁参照)

〔第Ⅲ地点〕 第Ⅲ地点の遺物出土量は他地点と比較にならないぐらい少ない。しかし、他地点から出土した土器片とは異なり、また岩崎式土器及び指宿式土器を伴とする遺跡からかって報告されていない新型式の土器が住居址と考えられる遺構の中及び周辺部から出土した。

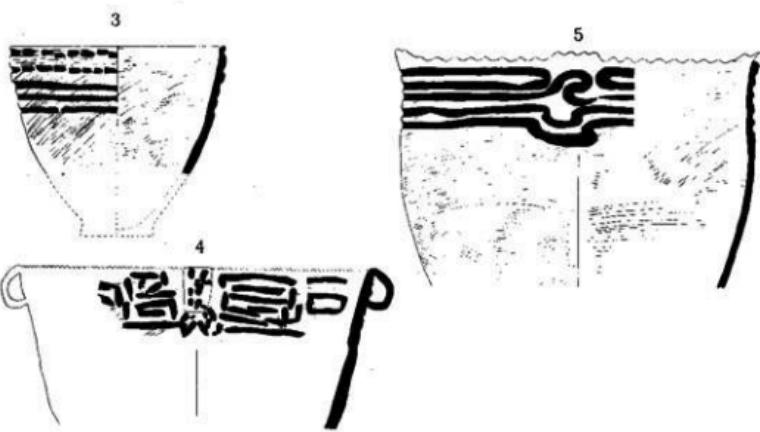
第6図-1は岩崎式土器と考えられる。口唇部は平坦な断面を有し、ヘラによる刻目がある。表裏とも器壁には貝殻条痕があり沈線は曲線化されている。2は指頭による巾広の浅い凹線により幾何学的に施文され、類似の出土例は第1・第Ⅱ地点ともにみられる。3～5は同一個体と考えられる。3・4は口縁部で三本の太く深い沈線を平行に施文し、山形突起部は沈線を山形に盛り上げてある。頸部から胸部は同様の沈線を用いて、あるいは岩崎式土器と類似した曲線文がみられ、沈線間に竹管を刺突してある器壁には表裏とも貝殻条痕が残る。器型は山形の突起部をもつ口縁部が外反する深鉢形を想定できる。焼成は良好な黒褐色で肉厚である。第8図-1・2は住居址と考えられる遺構部から出土した土器で同一個体と考えられる。口縁部は四ヶ所に山形突起を有し把手を想定できる。頸部から口縁部は肉厚となり外反し、口唇部もわづかに外反し平坦な断面を有する。器型は断面から市来式土器を想定できる感じがするが、口縁部は円形をなすので市来式土器の口縁部が角形になるのとは異なる。口縁部は二本の平行する沈線を間にし、棒状の用具により粒状の刺突文を三列配してある。頸部から胸部にかけて、貝殻条痕の器壁に岩崎式特有の曲線文がヘラによって施文されている。文様構成は1を基礎として抜いたと想定できるが、施文の余白部に2の部分を加えて施文したものと考えられる。土器底部は無文平底である。 (第6・7図 -26頁参照)

〔その他〕 土器底部は平底のみが出土した。岩崎式土器底部は織物の圧痕文が從前から知られていたが、その形態にも二種類あることが確認された。第7図2は、席目圧痕文であり褐色の雲母を混入している。第Ⅲ地点から1点だけ出土した。3・4は網目圧痕文である出土底部の約8分の2がこの圧痕文を有する。1は木葉の圧痕文を底部に有する底部で第Ⅲ地点の完型土器の近くから出土した。底の厚さは他土器の2倍あるが底部から腹部への厚さは逆に薄い。器壁はヘラにより調整されており、本遺跡からは1点のみ出土した。他の底部は無文平底である。

その他土器片の再加工による円盤3点が出土した。大きさは直径が1.8cm、3.7cm、4.7cmあり、岩崎式土器片を利用したと考えられる。



2



5

第8図 土器実測図

## 2、石 器

宮ノ前遺跡出土の石器は石、石鏃、石皿、スリ石、礫器、石核、剝片である。

石は第9回-1の磨製石がある。石質は頁岩で使用中に柄部、刃部は破損したものと考えられ、刃部の状態に破損後の二次使用の痕跡がみられる。

石鏃は黒曜石製2点、頁岩製2点が出土している。黒曜石製は打製で両脚とも破損している。頁岩製は頭部を磨き厚さ1mmと薄い。脚は破損している。第II地点から出土した。

石皿は、 $4.8 \times 3.1\text{cm}$ で厚さ1.1cmの完全品と8分の1だけ残ったものが出土したが、石質は硬質砂岩である。完全品は第II地点から出土し、他は第I地点から出土した。

スリ石は2点で、石質は砂岩であり、両面とも研磨されている。側面は打撃痕がある。

(第9回-11・12)

礫器の岩崎式に共作する発掘例は初めてである。石質は砂岩である。礫器の形態は四種類に分類できる。

イ) 第1形態(第9回5・6・8)

第1形態は、礫に一次加工せずに、礫の一辺のみに刃部加工しただけの石器である。しかし刃部の位置からさらに二様式に分類できる。5は礫の側面を加工し、6・8は礫の先端部を加工している。8は出土石器中最大で $16.2 \times 1.1\text{cm}$ で厚さは8.5cmある。

ロ) 第2形態(第9回2~4)

この形態は礫を拳大に打削り、一面には礫の原面を残し、側面に刃部加工を施した石器である。

ハ) 第3形態(第9回7・9)

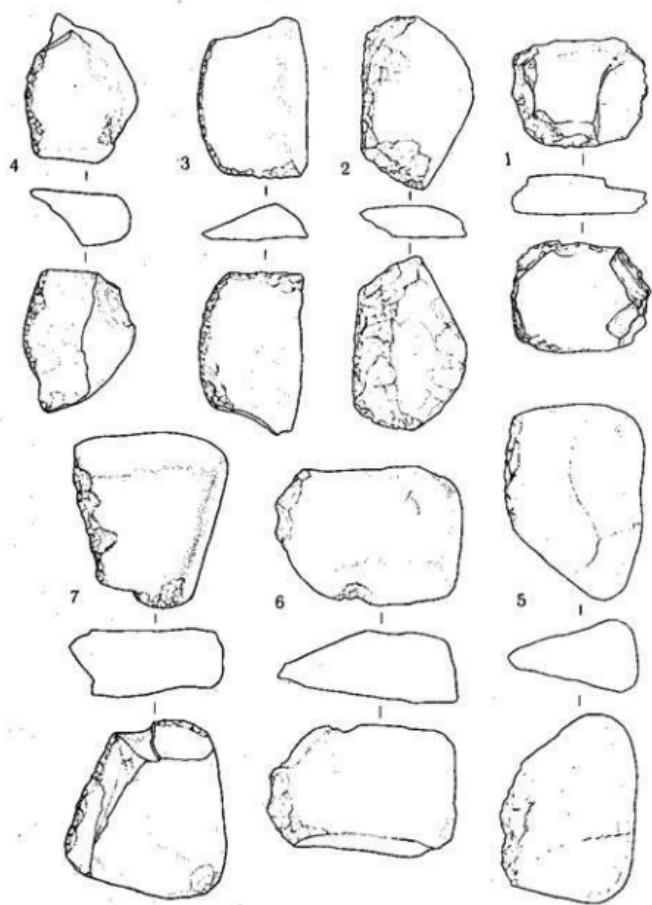
この形態は、礫の側面及び先端にも刃部加工したものである。7は二辺を打削りその後刃部加工をする。9は礫の両端及び側面に刃部加工をなす。

ニ) 第4形態(第9回-10)

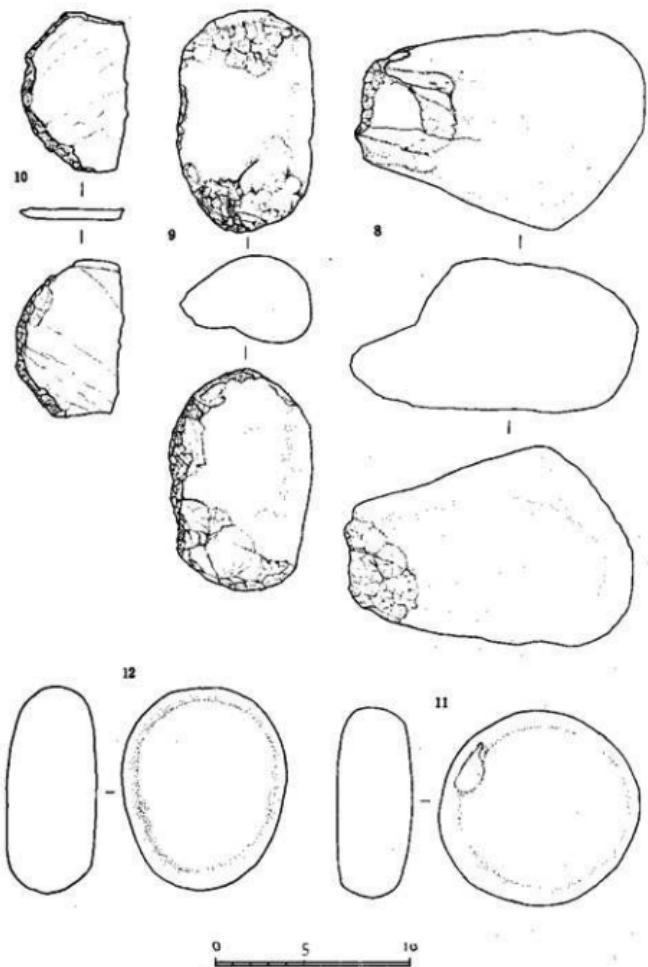
この形態は礫器として分類することに疑問を有するが、偏平な石器の側面に礫の原面が残る。大きな原石から横長に偏平な剝片をとり、その側面に刃部加工してある。刃部加工の状態から偏平打製石斧の一部と判断することは困難である。

以上のように礫器の分類を試みることが可能であったが、9・10は第III地点から出土し2・4・5・8は第II地点、3・6・7は第I地点から出土した。

石核、剝片は主に第III地点住居址の周辺から出土した。石核は1点であり、剝片は出土量が多い。そのため、今後さらにくわしく検討し石器製作技法の解明に役立てたい。



第9図出土石器実測の1



第9回出土石器実測の2

### 3、遺構

発掘地域において遺構としては、第Ⅱ地点において、ピット・5、第Ⅲ地点においてピット7、堀込み、及び住居址の一部が確認された。

第Ⅱ地点のピットはC-2区に2、D-2区に2、D-8区に1確認された。ピットの上面は規準点より-8.5cmから-8.7cmを示し、第4層に堀り込んである。1号ピットは直径20cm深さ8.5cm底部直径は6cmであるが、上部は不整形である。2号ピットは長径30cm、短径22cm、深さ4.9cmあり底部直径は1.8cmある。3号ピットはほど円形をなし、直径19cm深さ19cm、底部直径は9cmある。4号ピットは直径21cm深さ5.9cmあり、底部直径は14cmある。5号ピットは直径28cm、深さ5.9cm、底部直径は14cmある。これらのピットの中で1号及び8号ピットは他のピットと比較して浅い。ピットはC・D区に集中し、台地中央部寄りにはみられないことから、C-2区の東側に1m拡張したがピットは確認できず、さらにC-8区には石皿・土器片・炭化物が多量に出土したがピットは確認できなかった。

第Ⅲ地区において第8層にピット及び堀込みが確認できた。これらのピットは不規則にならび今後の調査の判断を待たねばならない。堀込みは、8.0cm×5.0cmの不整形の長方形を示し、深さは2.2cmあり遺物は出土しなかった。

住居址と考えられる遺構は、D-17・18区に広がる。発掘作業中に砾及び土器片が集中し、周辺部に前述のピットが発見されたので慎重に作業を進めた結果確認できた。

D-17区において南隅から北隅に砂岩礫が1列に並び、南隅に前述の広葉樹の压痕を有する土器底部が出土し、この土器片から、D-18区東隅に区域内を斜行し砂岩礫や剝片及び、土器片が並び出土した。この土器片及び砂岩礫の東側が堀込まれており、ほど方形のプランを想定できる。住居址は図のように一辺のみが完全に確認できたが、他の三辺は台地の開削により破壊されている。完全に露出した一辺の辺は28.0cmを数え、他の短かい南東部の辺は6.0cm、北西部の辺は21.5cmまで確認が可能であった。住居址は第3層を2.0cm堀出されている。床面と考えられる深さまで堀込んだところ直径17cmの円形で深さ2.6cmのピットを1個確認できた。このピットは第12回断面図のように斜めに堀込まれている。床面には、小さな炭状の粒子を含み、周囲の土壤より黒ずんだ焼土と考えられる土壤の広がりを11.5cm×8.0cm、厚さ1.7cmで確認できた。この焼土と考えられる部分に円形の暗褐色の土壤浸み込みがみられ、ピットと考えられたがこの焼土らしい部分と重複したため、ピットと断定することは不可能であった。住居址は、全体的に北側から南東部へゆるやかに傾斜し下がっていた。

## 第五章　まとめ

宮ノ前遺跡は岩崎式土器を単純に包含する遺跡地と考えられていた。しかし発掘の結果からは、岩崎式土器から指宿式土器までの関連性や、宮崎県尾立遺跡出土の綾式土器との関連性さらに大隅半島における文化の交流、基礎となる岩崎式土器分類の問題点を提起することになった。

本遺跡の主体をなす岩崎式土器は、河口貞徳氏が鹿児島県大隅半島の南隅に位置する岩崎遺跡の発掘結果から、下層式と上層式に分類を試みたものであり、南九州の中期末末葉に下層式を位置づけ、上層式は指宿式土器への移行形態として位置づけている。岩崎式土器の分類について河口氏は

岩崎上層式の器形は下層式と大体同じであるが、口縁部の波状の刻目を失ない平坦な口縁部となっているものが多く、口縁部外側の後に斜めに刻目を附したものもある。文様は頸部凹文を失ない、頸部の文様は平行曲線化したものを生じている。

岩崎下層式は口縁部に波状の切込みを有し、把手状の突起を有するものがある。文様は指頭圧痕の凹部の列を有し、頸部の凹曲線文は複雑であると報告している。さらに上層式には磨消繩文土器片が出土したことから、後期初頭に位置づけ、木ヶ暮遺跡出土の土器などから指宿式土器へと発展すると考察を進めている。しかし岩崎式土器の出土遺跡の多い大隅半島の数遺跡の遺物包含層露出地からの採集資料からは岩崎上層式下層式を分類することは困難であり、本遺跡の発掘結果においても岩崎式の分類は層位を基礎としては不可能であるが、岩崎式の発掘例が他にないので、今後の発掘結果を待たねばならないだろう。本稿では、岩崎式を分類せず考察を進めてみたい。

出土土器の岩崎式土器には宮崎県尾立貝塚出土の土器に類似した土器片が多数みられることから綾式土器と称される土器群についても概要を述べてみる。

綾式土器は A・B両式に分類され、A式は渦巻や曲線文を太い平行線文で抽く、B式は沈線間にアナグラ属の貝殻腹縁押圧による疑似繩文をあらわすものに分け、両者はセット関係にあるといわれ、器形から岩崎上層式的な要素、小池原式下層式的な要素が併用されていると考えられている。また指宿式土器は綾A式と同一であり、綾B式土器がセット関係にあるとするが基本的な考え方である。しかし綾式土器の発掘例から A・B両式に分類した田中熊雄氏の報告には、いわゆる岩崎式上層式・下層式土器に類似した土器片が多数示されており、また本遺跡においてもその出土土器片の多くは、尾立遺跡の資料にも多く類似した資料を探すことは容易である。このように述べてくると岩崎式土器群と綾式土器群の両者の関係は密接なものがあることが想定されよう。これからさらに両者の比較を具体的に述べてみよう。

岩崎式土器の器型は頸部より胴部の径が大きいものはみられず深鉢型になる。文様構成は中期特有の指頭を利して描いた太い沈線文やヘラによる沈線を數本平行して施す例もあるが、巻状に一見自由奔放を感じさせる文様が頸部から肩部に描かれている。口唇部に刻目を施したものが多く波状口縁をなし山形突起部を有するものもある。器壁には貝殻腹縁による条痕によって、表裏を調整してある。

綾式土器の器型は頸部がやゝしまり、胴部が張る後期特有の特徴を示し、文様構成は、平行する細い沈線によって施したよく整った器型文様構成からは端正さを感じさせる。綾B式の文様構成には岩崎式的な要素が多くみられる。太い沈線、貝殻条痕、山形突起等であるが、共伴する土器群には岩崎式的な要素がさらに多くみられる。口唇部の刻目は岩崎式特有のものであり、指頭による凹列は指宿式にはみられなく、貝殻条痕も指宿式的な要素とはいえない。

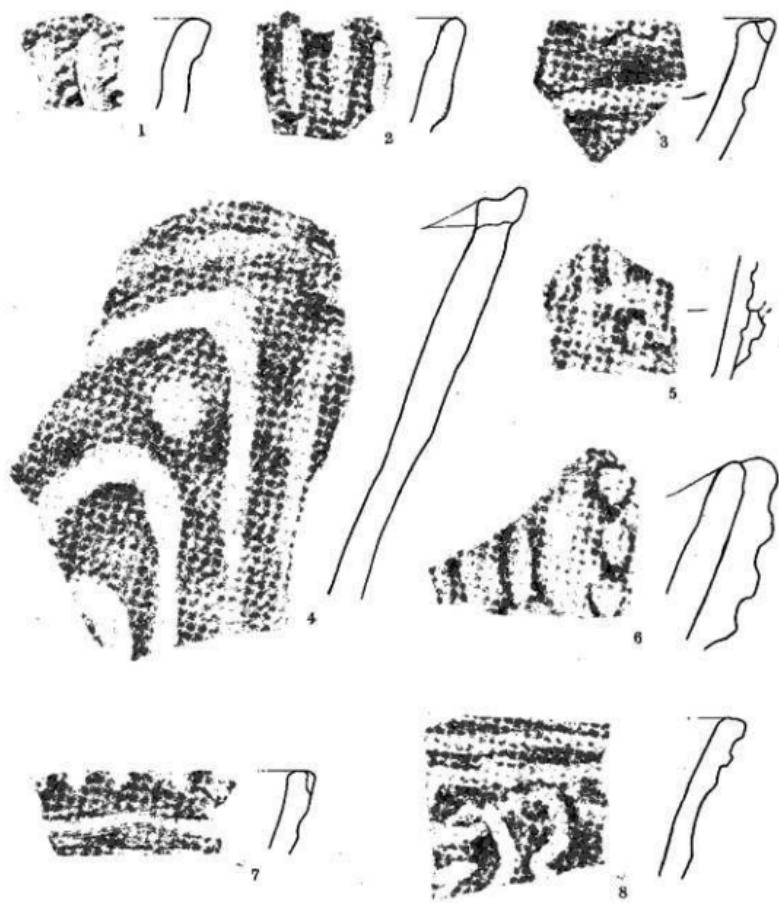
本遺跡出土の土器片には、より中期的な要素を有する第8図-4・5・第4図のような資料からも岩崎式土器は中期末という位置づけを変化することは疑問を生ずるが、綾式土器に岩崎式的な要素が共伴資料の中にも多く含まれることから綾式土器を再考せねばならないだろう。

南九州における縄文時代中期末に発生し、大隅半島というごく限られた地域の台地に分布する岩崎式土器の発掘例は、前述の岩崎遺跡を昭和25年に発掘して以来の発掘例であり、関係資料に乏しいが岩崎式が指宿式、綾式土器に影響を与えたという条件から周辺地域との文化の交流を研究するには絶好の資料であるので、今後岩崎式土器を中心としてさらに考察を進めねばならない。本稿による問題提起に先駆諸氏の御教示を期待するものである。

本遺跡は台地東側のみを発掘したが、岩崎式土器の埋蔵遺跡において台地周縁部に住居址を有する有望な集落遺跡であることが確認された。

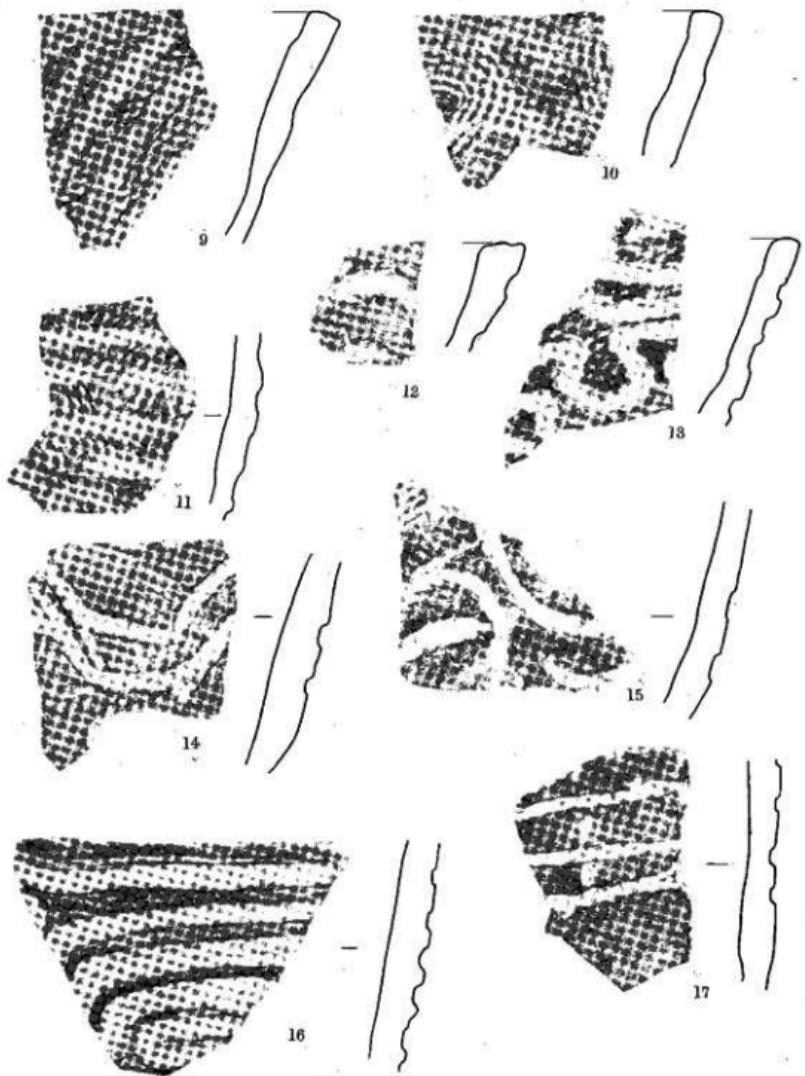
## 参考文献

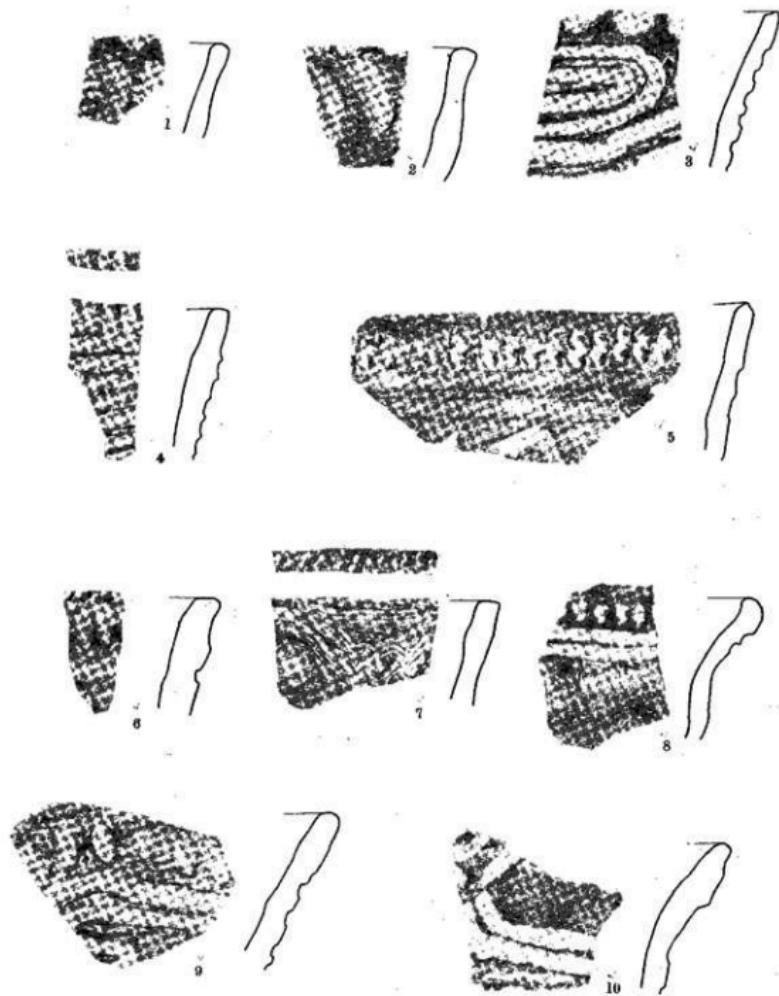
- ① <鹿児島県遺跡地名表> 鹿児島県教育委員会
- ② 河口貞徳 <南九州における縄文式文化の研究—岩崎及び木ヶ暮遺跡について—>  
鹿児島県考古学会紀要
- ③ ②と同じ
- ④ 正益重隆 <縄文後期文化—九州—> 考古学講座3(雄山閣)  
前川威洋 <縄文文化の発展と地域性—九州東南部—> 日本の考古学Ⅱ(河出書房)
- 小林久雄 <九州の縄文土器> 人類学先史学講座 第11巻
- ⑤ 田中熊雄 <綾町尾立遺跡の研究(1)(2)> 宮崎大学学芸学部記要



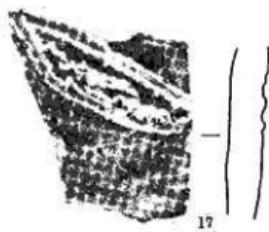
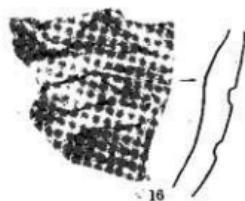
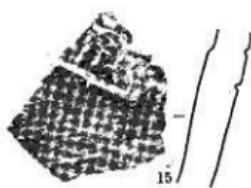
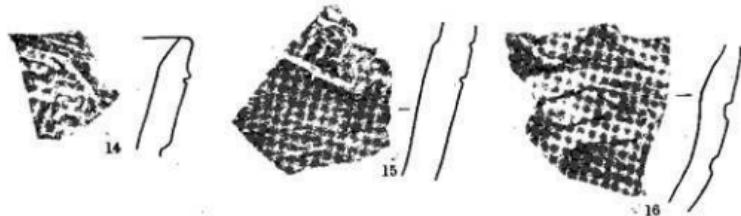
0 5cm

第4図 第1地点 出土土器



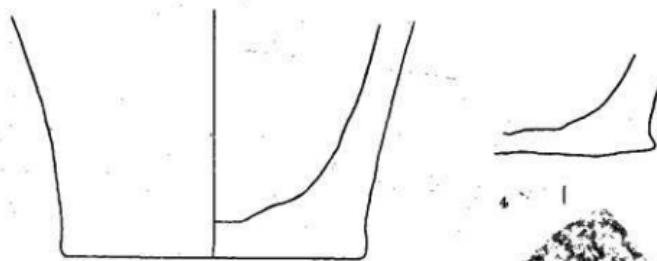
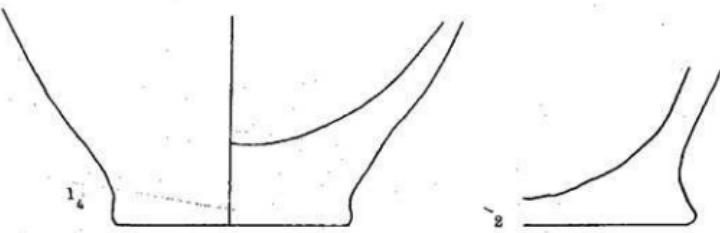


第5図 第II地点出土土器



第6圖 烤■地點 出土土器





第7圖 土器底部



遺跡地遠景  
(中央部白いテントの地点)



第Ⅲ地点 石核



土器出土状况



第三地点住居址